

# Howards End

## Money and Personal Relation

田 辺 宗 一

### 1

前号の小論において筆者は、Galsworthy の *Forsyte Saga*<sup>(1)</sup> についてちょっと触れたが、この作品と *Howards End*<sup>(2)</sup> を読み比べるとき、われわれは興味深い幾つかの事実を発見するであろう。ここではその詳細な比較検討をする余裕はないが、発表年代からみても *The Man of Property* は1906年であり、*Howards End* は1910年である。両作品とも、British Empire を築きあげた功績をになうイギリスの upper middle-class を、それと対照的な内面的精神的なものに生きる人々と対比させて前者を批判的に描いているという点、作品のテーマの上からいっても非常に似通っている。しかも、この両者の斗いは、どちらの作品においても、結局は、文学・芸術を愛する人々の勝利に終るのだが、しかし作品から読者が受ける印象は、反って敗北する upper middle-class の俗物たちから受けるものの方が強烈であるという点、つまり、作者が同情し、支持している登場人物たちよりも、むしろ、非難し、糾弾している人物たちの方が生き生きと real に描かれているのは皮肉な共通点である。従って、読者の脳裡に読後、烙きつけられる印象は、芸術や文学の世界の、business, materialism の世界に対する勝利という作者の期待乃至は予言ではなくて、むしろ、批判的に描かれている Forsytes や Wilcoxes の像であり、作者がこれらの作品を書いた主な意図も、反って、彼らの姿を描き出すことにあったのではないと思われるほどである。ただ、そうした基に似通ったテーマを扱いながら、この二つの作品は、作者の資質、性格の違いから非常に異なる世界をつくりあげているのは当然である。たとえば、Forster の作品は現代文明を象徴する都会 London に対して、内面的生活の場としての素朴な自然、土に対するロマンチックな nostalgia によって色濃く染められており、同時に motor-car, newspaper, golf-club, hay など数多くの symbol を用い、また超自然的能力や wisdom をもつ人物 Mrs. Wilcox, その分身ともいえる Miss Avery を配することによって、作品を象徴的予言的なもの、半ば神秘的なもの

にしている。それに対して、Galsworthy の作品は、一口にいって十九世紀末から二十世紀にかけての Forsyte 一族の一大絵巻物ともいえる realism の世界であって、前者のような mysticism を少しも感じさせない。そのように、もちろん甚だ異質的作品であるが、とにかく、同じイギリスの、しかも殆んど同時代の upper middle-class を対象としてとりあげているこの二つの作品を読み比べた場合、筆者には、Forsytes の方が Wilcoxes よりも、人間的に real に描けているという感じがする。いや、ことによったら、real ということばは、この場合当たらないかも知れないが、とにかく、Forsytes には人間的魅力を感じさせるものがある。Wilcoxes の方は余りにも一面的で、いわゆる悪玉に描かれすぎている。それは作品のテーマの上からのやむをえない結果ではあったろうが、とにかく、人物が余りにも片よったものに描かれすぎている。一体、Forster の作品には、余り魅力のある人物が登場しない。筆者の Forster の作品に対する最も大きな不満もこの点にある。優れた作品には、読後いつまでも読者の記憶に残る人物が必ず一人や二人いるものだが、Forster の作品にはそれが無い。この *Howards End* にしても例外ではない。著者自身は、Margaret に一番好意を寄せていると言っており、確かに作者に一番近い存在という印象を受けるが、その Margaret にしても、その言動や運命に読者の関心をぐいぐいと惹きつけてゆくだけの迫力に乏しい。これは、Forster にあっては、作者のテーマ、message が人物に常に優先しているためであろうが、小説家として、惜しむべき欠陥といえよう。

しかし考えてみると、こうした欠陥は、Forster の作品のみならず、現代小説一般に共通する宿命ともいえる欠陥かも知れない。つまり、現代小説においては、大体において、作品のテーマあるいはそれに附随するプロットが人物に優先しているということ、登場人物は作者が伝えんとするテーマ、message を具象化するのに奉仕する puppet に止まり、十分な肉づけが行われていないということ、あるいは、そうならざるをえないほど、現代のわれわれをとりまく環境がのびきならぬ問題を含んでおり、作者もそうした問題を人物を犠牲にしてまで扱わなければならぬほどせつまつまった状態、余裕のなさに追いこまれているということなのであろう。以前の一人あるいは数人の魅力ある人物を中心に、その運命、行動を辿ることにより、人間一般の問題を提示し、また、その生きた時代、社会環境を浮き彫りにするといった、いつてみれば、余裕のあるいき方ができなくなり、現在は、逆に、人物が特殊な現代的状況や、作者のテーマを説明し例証するために使われる——それも、多くの場合、特定の強烈な個性をもった人物ではなくて、人間一般に通じる典型的な人物が、ある特殊な状況、条件の下に、どのように反応するかといった一種の化学的実験じみた小説になっているような感じを与える。このような小説がかったの如き広範

な一般読者層の支持を失い、ごく一部少数の関心しか惹かなくなっているのは当然の成行といわねばなるまい。

とにかく、現代の小説あるいは芸術一般の行きづまりは、必ずしも、想像力の涸渇によるものではなく、想像力を働かせる場をわれわれが喪失したことに少くともその一斑の原因があるのではなからうか。科学の進歩、文明の発達、余りにも、人間の環境から、人間の存在それ自体から、その神秘性を奪いすぎた。夢をなくさせた。「月」一つ例にとっても、古人が月に対して抱いた詩的、情緒的感興を、われわれは抱くことができなくなった。このような状態において、既成の芸術がそのままの形で昔日の如き華々しい役割を演じることができないのは当然であり、小説も、その例にみれず、時代の変化に応じて、その性格を変えつつあるのもまた必然の成行なのであろう。

さて筆が横道にそれたが、この小論においては、*Howards End* において、upper middle-class がどのような面から描かれ、どのような点が批判の対象となっているかをこれから考えてみたい。

## 2

Forster は 1920 年に発表した注目すべき essay, *Notes on the English Character—Abinger Harvest* (1936)<sup>(3)</sup> に収録——において、イギリス国民の性格の根本は middle-class 的なものであると断じ、その特徴は *solidity, caution, integrity, efficiency* そして *lack of imagination, hypocrisy* であると述べている。これらの特徴は、すべての国の middle class の性格を特徴づけるものであるが、イギリスの場合、中産階級が過去 150 年にわたってその支配的中心勢力であったが故に、それが一般の国民の性格にまでなっているという。Forster が *Howards End* によって描き、弾劾したのも、そうした中産階級の性格、ことに、想像力の欠如、偽善的性格であった。いや、それは *Howards End* ばかりでなく、その処女作 *Where Angels Fear to Tread* (1905) から、最後の *A Passage to India* (1924) に至るまでの全作品において終始、その批判、攻撃的になっているのである。その点が、この作品と Galsworthy の *Forsyte Saga* との大きな相違点の一つとなっている。*Forsyte Saga* も同じようにイギリスの中産階級をとりあげて楯玉にあげているが、作者の攻撃的は、主として、彼らの *the sense of property* であり、*the Forsytes* が *monetary value* をすべての価値評定の基準としている点である。Galsworthy は、この富と財産とを最終の拠り所として、文学も芸術も、宗教をも信じない彼らの生き方を、芸術と愛に生きる人々との対立 *conflict* という形で描き、前者を断罪しようとした。これに対し Forster は、こうした物質的なもののみを信じる特性が、想像力の欠如、偽善的性格と相俟って、心情の上

に、対人関係に、どのように働いているかを、精神的なもの信じ人々と対比させて描き、さらに、人間の生き方、あるべき姿に対する作者の信条を伝えんとしている。つまり、同じように materialism を批判していても、その antithesis として前面に押し出しているのは、Forster の場合、文学とか美とか芸術ではなくて、人間間の心のつながりであり、信頼であり、愛情——love ではなく affection あるいは友情——である。D. H. Lawrence は、機械文明物質文明に押しつぶされて自己の本来の姿を見失った人間の救いを、男女間の愛情、sex を基盤とする physical love に求めんとしたが、Forster はその希望を personal relation に託したのだ。そこにおいて重要なのは愛情であり、それを裏切らぬ忠誠である。愛情から思いやりが出てくる。その思いやりには相手の立場に自分を置く想像力、感情移入のための想像力が不可欠なものとなる。ここに、Forster が middle-class の想像力の欠如をあれほど烈しく非難攻撃した理由を見出すことができよう。文学や芸術を愛するためには、もちろん、この想像力が必要である。しかし、Forster が強調するのは、文学や芸術そのものではなくて(4) その成立を可能にし、それを appreciate することを可能にする想像力であり、現実の人間関係 personal intercourse において働く想像力である。

さて *Howards End* に登場する人物を、money, property に対するそれぞれの関係乃至考え方から、おおよそ三つの class にわけることができる。この分類はまた、文学、芸術広くいって culture に対する彼らの姿勢に基づくわけ方とも一致する。すなわち、先ず British Empire を築きあげた upper middle-class の代表 the Wilcoxes. 彼らは専ら財の獲得、保持に汲々として、the things of the spirit に少しも関心を持たない種族である。彼らにあっては、あらゆるもの、あらゆる人間が、ただ彼らにとって利用価値があるかどうかによってはかれる。

a fellow for whom I never did have much use, and have less now.  
(pp. 219-220)

all the things and people for whom he had never had much use,  
and less now. (p.261)

彼らはつまり、Galsworthy の描く Forsytes と同一種族である。

Forsytes, who believe in none of these things (=literature, science, even religion), but turn them all to use.

*The Man of Property* ch. X.

二番目は、親譲りの財産によって culture の生活を楽しむ the Schlegels. この姉妹の父が materialism の雲におおわれる帝国主義ドイツから連れ、イギ

リス婦人と結婚してイギリスに帰化した idealist —— Kant や Hegel と同じ祖国を持つドイツ人——であることは意味深いことである。彼女らも父と同じく、知的ではあるが観念的であり impractical であって、現実の問題にうとい人々である。

they did not follow our Forward Policy in Thibet with the keen attention that it merits, and would at times dismiss the whole British Empire with a puzzled, if reverent, sigh. (p. 29)

作者は materialism 対 spiritualism という antithesis を, masculine world 対 feminine world, すなわち Wilcox 家対 Schlegel 家という形で提出している。シュレーゲル家は父の在世当時から feminine であり (p.46), Tibby という弟がいることも、少しもその性格を変えるのに役立っていない。いやむしろ、逆にそれを強調するのに役立っているとさえいえよう。というのは、名前からして弱々しい感じを与えるこの Tibby は、観念的世界に没入して現実の世界に一向関心を持たない男であり、——いくら姉にすすめられても就職しようとはせず、I want civilization without activity. (p. 118) という——男にしてはうますぎる手つきで家族の者にお茶を淹れてやり、'Auntie Tibby' と Helen から、からかわれる男なのだ。 (p. 45)

第三の登場人物 Leonard Bast は、本来ならば、羊飼あるいは野良の働き手として土に生きている筈の人間であって、機械文明の発達によって都市に吸収され、「燕尾服と一握りの ideas のために動物の栄光を捨てた」 (p. 122) 数多くの若者の一人である。彼は London の火災保険会社に勤めて辛うじてその糊口をしのぎ、乏しい金をさいて音楽会に通ったり、Ruskin を読んだり (Ruskin は当時 culture に憧れる若者の必読書と考えられていたらしい)、絵を鑑賞したりして the natural man と the philosophical man との間に横たわる深淵を泳ぎわたるうともがく人間である。従って、食べるために働かなければならぬ Bast の money に対する関係は、上にあげた Schlegels や Wilcoxes と自ら異なる。彼にとっては、金のあるなしはそのまま肉体的生命の維持に直結する切実な問題である。以上の他にも、色々な人物が出てくるが先ず、この三者がこの作品の最も重要な人物といつてよからう。この三者のからみ合いから、作者がどのようにそのテーマを追及しているか、これから探ってみることにしよう。

作品は先ず、大陸旅行で知り合った Wilcoxes に招かれて Howards End 邸を訪れた Helen が、そこの二男の Paul と恋におちるところから始まる。Helen 自身 a regular hen-coop と呼ぶ (p. 45) 女性的な家庭に育った Helen は、Wilcox 家を訪れて、自分の家とは異質の男性的雰囲気には惹かれる。Paul

に恋したのも、別に Paul 自身に魅力を感じたのではなく、彼女が生まれて始めて接した男性的な家庭に、たまたま彼女に適当な相手は Paul しかいなかったからだ。

The truth was that she had fallen in love, not with an individual, but with a family. (p.24)

しかし、その恋も一夜にして冷める。彼女がその中に the robust ideal を発見したと考えた彼らの雄々しさ、男らしさは、実は単に内面の空虚を糊塗するためのみせかけでしかなかった。

I felt that the whole Wilcox family was a fraud, just a wall of newspapers and motor-cars and golf-clubs, and that if it fell I should find nothing behind it but panic and emptiness. (p. 27)

かくて夢からさめた Helen は、その後、最後まで徹底的な Wilcoxes の批判者となる。第五章に入って、舞台は Queen's Hall に変わり、Leonard Bast が初めて登場する。彼は例の如く、culture を身につけんものと、ここにベートーヴェンの第五交響曲をききに來て遇然 Schlegel 姉妹と隣合わせる。音楽に夢中になって我を忘れた Helen は、Bast の傘をうっかり間違えて持ち帰る。それに気がついた途端、彼はもはや、それまでのように音楽に陶醉できなくなる。貧乏な彼は、Helen が間違えて持っていったのだと軽く考えることができない。盗まれたと思うと、平生彼にとって最も関心の深い宮の芸術の話も Monet も Debussy も彼の頭を素通りする。

he could not quite forget about his stolen umbrella. Yes, the umbrella was the real trouble. Behind Monet and Debussy the umbrella persisted, with the steady beat of a drum. "I suppose my umbrella will be all right," he was thinking. "I don't really mind about it. I will think about music instead. I suppose my umbrella will be all right." (p. 42)

しかも、それほど彼が心を煩わせる傘は、よれよれに傷んだ破れ傘だったのである。(it's all gone along the seams. It's an appalling umbrella. p. 43)。

作者はここで the rich と the poor をかみ合わせて、その考え方の相違(それは後に述べるように、必ずしも財のあるなしだけに基づくものではないが)を Helen の一つの行為をめぐって描き出そうとしているのだ。the rich と the poor の相違は、単に財の有無だけに止まるものではない。第七章で Margaret は伯母に向かっていう――

“I stand each year upon six hundred pounds…… And all our thoughts are the thoughts of six-hundred-pounders, and all our speeches; and because we don't want to steal umbrellas ourselves, we forget that below the sea people do want to steal them, and do steal them sometimes, and that what's a joke up here is down there reality——” (p. 64)

ここに財のあるなしが人間のものの考え方、感じ方の上に、どのように大きな影響を及ぼすか、従って人間間の理解と信頼を妨げるどんなに大きな障害となるかという点についての作者の主張を読みとることができよう。Schlegels が the rich に属し、Bast が the poor に属する人間である限り、この両者の間には真の理解は成立しえない——たとい、この姉妹がどんなに Bast に同情しようとも。所詮、彼らはお互い、異なる世界に住む人間なのだ。第二十七章の Helen と Bast との対話は、このことを如実に例証するものである。Wilcox のいらざる忠告によって失職してその日のパンにもこと欠く Bast は、もはや芸術にも本にも、以前のような興味を抱くことができない。彼の頭の中には、ただ仕事の口をみつけることができるかということしかない。これに対して Helen は、この人生にはもっと大切なものがあるではないか、美しいものが、音楽が、美しい星空の下の独り歩きがと責める。それに対して Bast は答える—

“Walking is well enough when a man's in work,” he answered.  
 “Oh, I did talk a lot of nonsense once, but there's nothing like a bailiff in the house to drive it out of you. When I saw him fingering my Ruskins and Stevensons, I seemed to see life straight real, and it isn't a pretty sight. My books are back again, thanks to you, but they'll never be the same to me again, and I shan't ever again think night in the woods is wonderful.”

“Why not?” asked Helen.

“Because I see one must have money.”

“Well, you're wrong.”

“I wish I was wrong, but —— the clergyman —— he has money of his own, or else he's paid; the poet or the musician —— just the same; the tramp —— he's no different …… Miss Schlegel, *the real thing's money, and all the rest is a dream.*” (イタリックは引用者)

しかし Helen は、そうした Bast の気持を理解できない。そのような考え

方ができるのは死を忘れているからだ」と反論する。われわれはいずれ死ななければならぬ運命にある。従って money 以外のものに頼らなくてはならない。死は money の空虚さを示すものだ。死は人間を滅すものだが、しかし、死があるからこそ、人間は money や、property などの物質的なものに窮極的価値を認めることを拒否せざるを得なくなり、materialism に終始する生活から救われるのだ。

Death destroys a man: the idea of Death saves him. (p. 253)

しかし、失職して生命の危機にさらされている Bast は、Death と the idea of Death との無限の相違を説くこの Helen のことばについてゆけない。Bast にとっては、Death は money の空虚を教えるものではなくて、逆に Death を遠ざける緊急必要物として、money の価値を高めるものであり、芸術や文学の空虚さを示すものだ。夜の更けるのも知らず、昂奮して説く Helen のことばに耳を傾けながら、おそらく Bast は、Venice のゴンドラの中から説く Ruskin のことばを読んだときと同じ感慨を抱いたことであろう——

And the voice in the gondola rolled on, piping melodiously of Effort and Self-Sacrifice, full of high purpose, full of beauty, full even of sympathy and love of men, yet somehow eluding all that was actual and insistent in Leonard's life. For it was the voice of one who had never been dirty or hungry, and had not guessed successfully what dirt and hunger are. (p.52)

Bast が職を失い妻と共に路頭に迷う身の上になったことは、無責任な情報を与えた Wilcox、さらにそれを取り次いだ自分に責任があると感じて、彼ら夫婦を無理に汽車に乗せて、Wilcox の家へ抗議し就職の世話を頼みに連れてゆく、その親切な筈の Helen が、帰りの切符を与えるのを忘れて立去りそのため、Bast は妻の腕飾りを質に入れて汽車賃を捻出せざるをえない羽目に陥る (p. 335)。この episode はさきの対話が行われた直後のものであることによって、いかに Helen が Bast 夫婦に同情しようとも、その同情や、理解にはいかんともしがたい限界があり、所詮彼らはお互い異なる世界の住人であることを強調するのに役立っている。

さてこのように Leonard Bast は生命の危機にさらされて、文学や芸術に対する関心を失い、the real thing is money、と Wilcox 的考え方を抱くようになるが、彼にはまだ救いがある。彼は、まがりなりにも things of the spirit に関心を持ち、毎日乗り物によって自分の家から職場へと運ばれて、一日机にかじりつき、そしてまた乗りものに運ばれて我が家に戻ってくるといった単調な



繰返しの生活に疑問をもち、自分にもわからぬ衝動に駆られてある土曜日、徹宵、森を歩き廻る (Chapt. XIV)。また、彼には他の人間に対する思いやりがある。自分の妻が一昔前、Wilcox の情婦であったのを知ったとき、Helen に与えるショツクを思いやって (姉の Margaret はこのとき、Wilcox と婚約中である) それを知らせまいと心を遣う。さらに Bast は、一夜、Helen とかりそめの関係ができたとき、妻 (実は内縁の妻) に対してこれまでと違った優しさ *tenderness* を抱くようになる。それまでの Bast は、若気の過ちから関係のできたこの女に、「自分は英国人だから、いったん結婚するといった必らず結婚する。嘘はつかない」 (p. 56) という自分のことばに縛られて、心ならずも同棲を続けてきたのだった。しかしこの Helen との関係によって、彼は「結局自分と妻は同類だ」"There is nothing to choose between us, after all," (p. 335) と考え、Jacky に対して優しく振舞うように努力する。つまり彼は自分以外の人間の行為と自分の行為とを同一平面上において結びつけて考えることができる。作者 Forster のこの小説における中心テーマあるいは少なくともその一つは、この「結びつける」ということである。見出しにも "Only connect..." ということが書かれてある。この connect ということばに作者は、単に自分の行為と他人の行為とを結びつけて考えるということだけではなく、同一の人間の中の *passion* と *prose* を結びつけるとかその他の *connection* を含めていると考えられるが、とにかく、この能力を持つ Bast は救いに値する人物である。Wilcox が断罪される最も大きな理由も、実にそこにある。彼はこの能力を持たないのだ。このことについては後にさらに触れることにしよう。

上述のように *money* あるいは *property* は、人間の思考、感情に重大な影響を及ぼし、人間間の理解を妨げる大きな障害となるが、作者は Bast の場合には上のように救いの余地を残している。それに対して、Wilcoxes は全く救われざる人間として描かれている。彼らは完全に Mammon にとりつかれて健全な人間の心情を喪失した亡者である。彼らにとって *money* や *property* は単に何かを得るための手段ではなくて、それを獲得することが人生を生きる最高唯一の目的となっている。従って彼らの思考、行為には常に金銭的配慮が先に立つ。例えば Wilcox が Margaret と婚約したとき、先ず彼女の諒解を求めるのは、自分の息子や娘たちに財産を分けてやらなければならないということである。しかも彼は、その話を具体的に持ち出すことができず遠回しに切り出すので始め、Margaret は何のことも理解できない。がやがてそれと気がついた彼女は叫ぶ――

"You mean money. How stupid I am!"

Oddly enough, he winced a little at the word. "Yes. Money, since

you put it so frankly. I am determined to be just to all — just to you, just to them. I am determined that my children shall have no case against me.”

“Be generous to them,” she said sharply. (ch. XX)

息子の Charles に至っては、そうした考え方が、さらに徹底している。父親の場合は、まだ幾分、同情の余地が残されているが、（それは、Margaret との結婚を読者に少しでも受け入れ易いようにするための作者の配慮からであろうか）Charles は終始、手前勝手に横柄で、脳中ただ金あるのみといったもともと典型的な Wilcox 的人物として描かれている。その Charles も妹の Evie も、父親が Margaret と婚約したことを知らされたとき、何よりも先ず自分たちがもらう財産の減ることを恐れて、その父親の行為を裏切りと感じるのである。

Evie heard of her father's engagement when she was in for a tennis tournament, and her play went simply to pot. That she should marry and leave him had seemed natural enough; that he, left alone, should do the same was deceitful. (ch. XXV)

自分や自分の子供たちの経済的心配しか念頭にない彼らは、自分たちが結婚して、あとに独り残された widower の父のことなど考えてもみない。

Charles carefully reviewed their dealings with this family, until he fitted Helen, and Margaret, and Aunt Juley into an orderly conspiracy. Paternity had made him suspicious. He had two children to look after, and more coming, and day by day they seemed less likely to grow up rich men. “It is all very well,” he reflected, “the pater saying that he will be just to all, but one can't be just indefinitely. Money isn't elastic. What's to happen if Evie has a family? And, come to that, so may the pater. There'll not be enough to go round, for there's none coming in, either through Dolly or Percy. It's damnable!” (XXV)

そうした彼らも、父に対して人並みの愛情を持っていないわけではない。

“I do not intend to forget these Schlegels in a hurry. As long as they're on their best behaviour we'll behave, too. But if I find them giving themselves airs, or monopolizing my father, or at all ill-treating him, or worrying him with their artistic beastliness, I

intend to put my foot down, yes, firmly."

(XXI)

このような、すべての思考、心情の上に、money が君臨している Wilcoxes の性格は *Howards End* に繰返し描かれている。彼らの乗った車が猫を轢いたとき、「なに、たかがつまらぬ猫一匹 a rotten cat だ。賠償金を払えばいい」と泣き叫ぶ少女の気持ちに一顧も払わない彼ら (XXV)。また、昔の情事がばれて狼狽した Wilcox は婚約者の Margaret が許してくれたとき、先ず彼の頭に浮かぶのは、これを種にゆすられはしまいかという恐れである。

Not for the first time, he was threatened with blackmail. He was rich and supposed to be moral; the Bast's knew that he was not, and might find it profitable to hint as much. (XXIX)

このように、持てるものはそれを失うまいと執著する。持たざるものが近づくとき、盗まれはしまいか、奪われはしまいか、また利用されはしまいかと警戒する。

When people wrote a letter Charles always asked what they wanted. Want was to him the only cause of action. (XI)

従って、この兩者、持てるものと持たざるものとの間には、そうした警戒心が働く限り、人と人との心の結びつき、正常な personal relation は成立しえないであろう。the poor に属する Bast でさえ、前に述べたように、その破れ傘に執著し、盗まれたのではないかと、住所を訊ねるのは傘を返してくれるためではなく、空果に入ろうという意図から出たのではないかと疑うのである。このような嫌疑をかけられた Margaret は To trust people is a luxury in which only the wealthy can indulge; the poor cannot afford it. (p. 37) と考えるが、事實は必ずしもそうではないことは Wilcox の例からも、また次に挙げる彼女の伯母のことばからも明らかである。音楽会の帰り、傘をもらいに Margaret に連れられて、その家を訪ねた Bast が、それほど執著した傘が破れ傘であったことを恥じて挨拶もそこそこに帰ったあとで、伯母は、彼を家にあげないでよかったという――。

"We know nothing about the young man, Margaret, and your drawing-room is full of very tempting little things." (p. 44)

このことばは、平生、なにかという Art や Literature ということばを得意げに口にし、その心酔者をもって自任する伯母も、実は、その心情において Wilcoxes に近い人物であることを物語るものである。これに対して、Margaret や Helen は money にとらわれていない人物として描かれている。

(ただ、彼らがそのように money や property に対して余裕のある態度をとれるのも、妻の財産で生活した父と同じく、Wilcoxes や Bast のように、パンのために額に汗して働いたことがないからだという皮肉な見方もできよう) とにかく、彼らにとって最も重要なのは personal relation である。人と人との信頼であり愛情である。従って彼らは、上の伯母のことばに対して、そんな疑いをかける位なら、むしろ、Bast が実際に盗人であり、大切にしている apostle spoon を全部盗んでいってくれた方がまだましだと反論する。こうした考え方はさきにも触れたその父親の薫陶によるものである。

"You remember 'rent'? It was one of father's words — Rent to the ideal, to his own faith in human nature. You remember how he would trust strangers, and if they fooled him he would say, 'It's better to be fooled than to be suspicious — that the confidence trick is the work of man, but the want-of-confidence-trick is the work of the devil.'" (V)

こうした人間間の理解、信頼そして愛情を阻む大きな障害となるのが sense of property である。日本でも、俗に「金銭は他人」というが、このことをいったものであろう。money の問題は、濃やかな筈の肉親間の愛情にさえ、ひびを入らせる。その例は上に挙げた Wilcox の再婚に対する子供たちの反応にもあらわれているが、第十一章の Mrs. Wilcox の遺言に対して示す家族の態度に、より強烈に描かれている。

この章は、例の Forster 一流の巻頭 surprise をぶつつけるという手法で始まり Mrs. Wilcox の死を物語る章である。読者は彼女の登場以来、小説中の他の人物とは異なる世界に住む人間として、大きな関心と興味をもって十一章まで読み進んできて、突如として、彼女の死を告げ知らされるのである。この手法については、前の小論で触れたが、「これからどうなるか」というサスペンスで読者を釣ってゆく手法をあきたらなく思った Forster は、その代りに時々、このような surprise をぶつつけて読者の、ともすればふさがりそうになる目を覚まさせようとするかのようである。音楽をより純粋な芸術形式として愛する Forster は、その作品に音楽的手法を用いていると思われるが、この surprise も、筆者の思いすごしであろうが、ハイドンの「驚愕」をまねたのではないかという気がする。

それはともかく、The funeral was over. という文章で始まるこの章は先ず Mrs. Wilcox の死を悼む家族の追憶を描き出す。ことに夫の Henry は息子や娘と顔を合わせることも避けて独り自室に閉じこもり、良き妻、良き母親であった彼女の面影を涙と共に偲ぶ。

He suffered acutely. Pain came over him in spasms, as if it was physical, and even while he was about to eat, his eyes would fill with tears, and he would lay down the morsel untasted.

He remembered his wife's even goodness during thirty years. Not anything in detail — not courtship or early raptures — but just the unvarying virtue, that seemed to him a woman's noblest quality. So many women are capricious, breaking into odd flaws of passion or frivolity. Not so his wife. Year after year, summer and winter, as bride and mother, she had been the same, he had always trusted her. Her tenderness! Her innocence! The wonderful innocence that was hers by the gift of God.

このように、自分の感情を肉親にさえ、あらわに見せることを恐れる彼らは(6)、もちろん面に表わしはしないが、妻を思い母を偲んで悲しみに沈む。その彼らが、Mrs. Wilcox の遺言を知らされた途端、手の平を返したように豹変する。Mrs. Wilcox は、その持ち家の *Howards End* を、家を単に property としてしかみなさない息子の Charles には譲らず、その内面的精神的価値を理解する Margaret に譲りたい旨を、死の間際に鉛筆で走り書きして託児所の *matron* に託する。それを受けとった瞬間、彼らの悲嘆は跡かたもなくどこかにふっとび、彼らは、自分たちの property を守るべく団結して立上るのだ。彼らの頭にはただ *sense of property* しかない。嘆き悲しんだ自分たちの姿は遠い過去のもの、いや現実ではなかったような気さえしてくる。

“Come in, all three of you!” cried his father, no longer *inert*.  
He stood in the porch, *transformed*, letters in his hand.

(イタリックは引用者)

In silence they drew up to the breakfast-table. The events of yesterday — indeed, of this morning — suddenly receded into a past so remote that they seemed scarcely to have lived in it.

親子は首をあつめて前後策を協議し結論に達する。その結論はむしろ、協議の前から出ていたといつてよい。協議はただ、それをいかに自分に対して正当化するかにあったのだ。彼らはその遺言が病人によって鉛筆で書かれたものであり、正式の手続をふんでいない故に法的効力を持たないと結論し破いて火にくべてしまう。握ったものは離すまいとする彼らの強固な *sense of property* の前には、肉親の死ぬ間際の切なる願いも一片の世迷言と片づけられてしまうのである。

They did neglect a personal appeal.

そうした自分たちの行為を彼らは、妻に対する、母に対する裏切りと考えない。いや、それどころか、彼らは母親の行為こそ自分たちに対する裏切りと考えるのだ。

Yesterday they had lamented: "She was a dear mother, a true wife: in our absence she neglected her health and died." To-day they thought: "She was not as true, as dear, as we supposed." ... Mrs. Wilcox had been treacherous to the family, to the laws of property, to her own written word.

彼らは、どうして妻が、母が、その家を自分たちには譲らず、Margaret に与えようとしたか、全く考えも及ばない。従って、次の Evie のことばは実に ironical である。

"Mother believed so in ancestors too — it isn't like her to leave anything to an outsider, who'd never *appreciate*,"

(イタリックは引用者)

このように、作者は、money, property を人間間の信頼さらに愛情に優先させる Wilcoxes, しいてはイギリスの upper middle-class の性格を痛烈に描いている。それと共に作者はまた、Mrs. Wilcox の行為を自分たちの愛情を裏切ったものと批判しながら、その遺言を破棄した自分たちの行為を裏切りと思い及ばない想像力のなさ、connect する能力の欠如を鋭く炙ぐっている。この、作者のことばを借りれば、muddle-headedness は、sense of property と共に人間と人間との真の理解、信頼愛情を阻むものとして、作者がもっとも烈しく糾弾する点である。Helen が Bast の子を宿して彼らの前に現われたとき、Henry は昔、自分が Jacky と不倫を犯して妻を裏切ったことを忘れて Helen を非難し、亡き妻の思い出を冒瀆するとして彼女が Howards End に泊ることを許そうとしない。

I have my children and the memory of my dear wife to consider.

それまで何とかして Henry の目を覚まさせようと忍耐を続けてきた（今は）妻の Margaret は、遂に堪忍袋の緒を切って叫ぶ。このシーンは、劇的場面の少い本書におけるもっとも劇的なシーンであり、この作品の climax といつてよいであろう。

Margaret rushed at him and seized both his hands. She was transfigured.

“Not any more of this!” she cried. “You shall see the connection if it kills you, Henry! You have had a mistress—I forgave you. My sister has a lover — you drive her from the house. Do you see the connection? Stupid, hypocritical, cruel — oh, contemptible! — a man who insults his wife when she’s alive and cants with her memory when she’s dead. A man who ruins a woman for his pleasure, and casts her off to ruin other men. And gives bad financial advice, and then says, he is not responsible. These men are you. You can’t recognize them, because you cannot connect. I’ve spoilt you long enough. All your life you have been spoiled. Mrs. Wilcox spoiled you. No one has ever told what you are—muddled, criminally muddled. Men like you use repentance as a blind, so don’t repent. Only say to yourself, ‘What Helen has done, I’ve done’.” (XXXVIII)

われわれは、この烈しい Margaret のことばに、作者自身の Wilcox 族に対する痛烈な弾劾の声を聞く。しかも、裁かれているのはわれわれと無縁な人間ではない。われわれ自身なのだ。

以上、われわれは money が personal relation に重大な影響を及ぼすという点、さらに、真の personal relation に、手前勝手な、想像力の欠如からくる muddle-headedness がいかに大きな障害となるかという点に関する作者の主張をみてきた。それでは望ましい人間関係とはどんなものか。その一例をわれわれは Margaret と Helen との関係に見出すことができよう。この作品においては女性間の愛情——この場合は姉妹であるが——が描かれ、次の、そして最後の作品 *A Passage to India* においては、男と男の間の友情がとりあげられているのは興味深いことである。しかし、われわれがこれらを読むとき、愛国心を友情に優先させたとしてブルータスを非難した Forster が、作品において描く愛情乃至友情は、いかに頼りない、はかないものであるか感ぜざるをえない。例えば、この Margaret と Helen は趣味や考え方を同じくして、多くの言葉の媒介を必要としないほど理解と愛情によって結びついた間柄にもかかわらず、Margaret の結婚問題を契機として、一時期にせよ仲違いをするのである。

Then Margaret thought, “Helen is a little selfish. I have never behaved like this when there has seemed a chance of her marrying.” (p. 182)

ここに男には不可解な女性心理が物語られており、それが確かに現実であり

作者の insight の深さを示す一証左ともみることができであろう。だがしかし、あれほど理解力、抱擁力にとみ、しかも、Helen のこの上ない理解者である筈の Margaret にしては、実に意外な考え違いであり、われわれは、人と人との結びつきのはかなさを、ここにも痛感せざるをえない。そしてそのような頼りないものに人間の唯一の救いと希望を託した作者の pessimism, この世のものに絶対的、永遠的なものを認めえない彼の pessimism に思いいたらざるをえない。ベートーヴェンの第五交響曲の鬼たちはさりげなく呟く——

They merely observed in passing that there was no such thing as splendour or heroism in the world…… Even the flaming ramparts of the world might fall. (ch. V)

「第五」と同じく、この作品は一応 happy ending の形をとり、生の喜びと希望にもえる Helen の言葉で終ってはいるが、その底を流れる、人間のなべての営みのはかなさの旋律は、読後なおわれわれの耳に消えず鳴り響くのである。

#### 註

- (1) Galsworthy, *The Man of Property* (Kenkyusha ed.)
- (2) *Howards End* London (Edward Arnold) 1960.
- (3) *Abinger Harvest* London (Edward Arnold) 1961.
- (4) 作者が Art, や Literature を絶対視していないことは、これらのことばを Property, Propriety, Votes for Women などのことばと共に常に capital letter で始めていることから察せられるし、また、Wilcox 的な考え方をもっている Aunt Juley に口ぐせようにいわせていることから明らかである。例えば——  
“What do you think of the Wilcoxes? Are they our sort? ……Do they care about Literature and Art? …… Literature and Art. Most important.” (p. 9)
- (5) Cf. Notes on the English Character: —  
‘For it is not that the Englishman can't feel — it is that he is afraid to feel. He has been taught at his public school that feeling is bad form. He must not express great joy or sorrow……?’